特251
21

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

回教及回教問題

田中逸平

東方書院

始

特251
21

回教及回教問題

田中逸平

目次

序　言……一
一、回教入門……五
二、禮拜と方向、時及沐浴……七
三、儀律と宗派……一〇
四、メッカハンヂ……一四
五、回教問題……二一

回教及回教問題

序言

田中逸平

嘗て日本宗教大講座の講座目を一瞥したとき、一切の科目は皆備はつてゐるが只一つ回教に就いて全く缺けてゐたのを遺憾に感じたので、道教の部門を擔任してゐらるゝ小柳博士と何かの話の序に此事を謂へることありしに、幾月かを經過した時、本講座の編輯者たるが突然訪ねて來て、予に回教に就いて何か書けとの事である。編輯者とは舊識の間であるが、同君が本講座の編輯責任者であるとは存ぜぬ事であつた。君ならば予の回教徒たることを知り、又嘗て拙著の仔細なる批評等をも試みられたり、或は回教方面に關する予の動靜に關しても相當消息を知つてゐる人である。其人から突然ながら原稿紙をつきつけられての依囑を、一概に辭する譯にも行き兼ねて、止むなく「回教及回教問題」と題して卑見を略說することゝした。

本講座が既に回教を遺失した如く、未だ日本には宗教としての回教は極めて新しき事實であつて、その信徒と稱する者の如きも十指を屈する程の數にも達してゐない。又之を學術的に取扱つてゐる處も、駒澤大學と大正大學などに大久保幸次と云ふ人が「回教發達史」か何かを講じてゐる位の事であらう。併し實際問題としては、日本國內に露國

の亡命者たる可なり多くの回教徒が來住してゐる、又神戸附近にゐる印度人及支那人の回教徒は相集りてその回教徒としての禮拜及宗教的生活を行ふてゐる。又關東州租借地内には支那人の回教徒が數千人も居るが、現に大連に新たに一回教寺院が滿鐵などの淨財寄附もあつて建設されてゐる。此外奉天には滿鐵附屬地内に回教大學を創立せんとの計畫なども企てられてゐる。併しこんな形勢も極めて近來の事で、大正十一年春頃奉天にある一日本新聞紙上に回教徒の宗教的戒律に就いて侮蔑的記事があつたが、奉天回民の機關紙醒時報が之を慨して支那全回教徒に檄を飛ばした事がある、その檄文を見たる予は將來の日支關係及對全回教民族との交渉の上に甚だ憂ふべき事なりと思ひ、窃かに日支當局に注意して問題を紛糾せしめずに解決することが出來た。滿鐵の如き多年在滿幾多の回教民に接觸を持ち乍ら未だ嘗て此方面の調査も注意も怠つてゐたが、此時から注意する所ありて、現にバシキール民族代表として日本に來住してゐるクルバンガリエフ、奉天回教寺院の教長張德純などに依囑し、支那回教の調査と之が聯絡などに就いて多少の計畫する所があつたが、かゝる政策的態度は却つて「宗教即全生活」なる回教民には一種の反感を與へた形跡があるのを觀て、予は滿鐵當局に注意を促しておいた。併しこんな狀態から兎に角今日では我が租借地内にも新たに小さい乍ら回教寺院が建てらるゝに至つた。

嘗て明治三十三年北清事件の義和團なる暴徒は、實に回教徒を中心とした排外的運動とも考へらるゝ如く、此教民の憤激性は支那民族中に在りて自ら別種の作用を爲すものである。故に對支問題を考察する上に「支那に於ける回教徒」と云ふことは閑却してはならぬ。我が陸軍にては常に支那問題に對しては最も注意を拂へるを以て、從つて陸軍關係者中には、軍事眼を以て支那の回教徒に就き夙に相當の調査する所あり、又時に多少の交渉をも生ぜし事あるやに思はるゝも、之は日本に何等宗教上の基礎ありての事ではないから、其關係者の如きも回教徒でもなく、又其接觸が回教其者の上に何等の結果を持來したとは思はれぬ、殊に某々等の爲せし汎回教運動を種の芝居の如きは印度又は支那の回教徒に非常の惡影響を與へてゐる。

佛教は勿論の事、耶蘇教にしても支那といふ大なる濾過池を經て日本に傳はり來つた樣に、以上の如き極めて微々たる回教及回教問題も支那を緣にして日本に及んでゐる、從つて是に觸れたる人々も支那文明の基礎又は其の影響を受けたる者であることは先づ以て注意すべき點であらう。二三年前上海に居る佐久間貞次郎と云ふ人が、漢英兩文の雜誌「回光」なる回教機關誌を發行したことがある。之は東亞に於ける回教問題の將來には大に必要な企てであつた。併し「宗教として回教」その者には佐久間と云ふ人自身も、此機關も餘り熱心でなく日本人としての回教に關する創始的事業として寧ろ失敗に終つた。此頃北京から邦文月刊雜誌「回教」と云ふのが發行された。之は川村狂堂といふ日本の回教徒としては蓋し最初の一人である篤信家の試みである、之は純宗教的立場にあるので至極好き企てである と思ふ、永續して發展せんことを希望する。此外近頃トルコからバツチ山岡光太郎君が久々に歸つて來た、日本に於ける先覺たる君の今後は回教問題の上に大に光彩を放つ者であらう。

日本に於ける回教に關する著述とし十二三種を擧げ得べきも、嘗て新嘉坡に居た瀧川龜と云ふ人の「回教」と云ふ本が大正七年に警醒社から刊行されてゐる、同君には別に「南洋に於ける回教」なる著述もあると記憶する、「回教」は比較的多く回教に關する諸資料を列記してゐるが、門外漢が之を通讀してもさて回教と云ふ宗教の實體に就いての概念を得ることは出來ないかの恨みがある。之は多く英人宣教師の手になれる書物の譯著であらうから是非なき次第

である。此他斷片的の記事は昨今可なり散見されるが端的に「回教とは何ぞや」と云ふことを知るに至る邦人の著述は未だ出てゐないやうだ。又回教の經典は世界文庫刊行會本として、坂本健一君の英譯本からの和譯書がある、之は主として Zale の英譯本に據たらしいが、同君が宗教としての回教に門外漢であるから回教の主神「アルラホ」に就いての概念が捕へられずに、妙な誤譯が重要なる點に於て見出さるのは是非なきことであらう。然れど其附錄の文字は頗る有益であると共に同君には別にムハメット傳二冊がある、多くの優良なる邦文耶蘇傳のある中に、甚だ寂寥の感はあるが此の小冊子と雖も大に著者の勞を多とする。國際政局の上より觀たる回教及回教の諸問題に就ては、山岡君の「回教の神秘的威力」などが唯一の著述であらう。

「回教」と云ふ名からが既に支那の俗稱を其儘に通用してゐる日本であり、又日本の回教徒又はその關係者が多く支那と緣故のある人々であるから是等の人は支那に於て出版されたる「漢ケターブ」卽支那譯本又は支那の回教學者の著述等を讀んだ者が多い。而して支那には相當に既刊書物があるけれども未だ漢譯經典（コルアニ）は完成されて居らぬ、之は回教にてはアラビヤの言語を通じてマホメットに天啓せし神語を尊重し、譯音を喜ばず寧ろ之を排したる結果として耶蘇教々典の如く許多の外國語譯を有せず、從つて支那の如き少くとも唐以後に於ては盛行したる回教にして、その經典すらも久しく譯述することなく、昨今に至りて漸く王靜齋等の手に依つて完譯を急ぎつゝある次第である。

以上のやうな日本に於ける回教の情勢に一瞥を加へて、豫定の紙數内に於て回教の大要及現時の回教問題を提示して日本宗教大講座の爲にその遺漏を埋むることゝしやう。

一　回教入門

回教と謂ふ名は支那の俗稱に過ぎぬ、正しくアラビヤの原名に從へば「イスレアム」と呼ばねばなるまい。英語讀みに Islam と謂ふのが回教徒以外の文明人の通稱となつてゐるからイスラムと日本でも呼ぶ方が妥當であらう。支那にした所が文字こそ回教又は回々教と記しても、「クワイキヤウ」とも「クワイ〳〵キヤウ」とも發音せぬ。「ホイチヤオ」又は「ホイ〳〵チヤオ」と云はねば通用しない。イスラムを支那で回教と謂ふのは、東トルキスタン地方なる回乾民族が先づイスラム教に歸依し、此民族が唐の安祿山の亂以後其武勇を以て中國の王朝を助け、逐次華人と都城又は村落内に混住するに至り、支那人種より此民族を觀て回子（ホイツ）或は回々（ホイホイ）と輕侮的に呼び、その信教を目して回教と稱したるが、後には教徒自身も回々を以て名とし、甚しきは回々の字義と音聲に無限の貴重性をも附會し「回々原來」と云ふ著書すら流行するに至つた。

併し、イスラムの徒が譯音を喜ばぬことは支那にても同樣で回教を「イスレアム」、回教徒を穆民（ムーミン）、「ムスリン」、「ムスリマアニ」等の原音を以て稱してゐる、又其教義よりして淸眞教、或は潔教等の漢字を適用してゐる、而して昨今は淸眞寺（チンヂエス）と云ふことにしてゐる。併し之とてもアラビヤ原名マスヂツドを訛りてメスヂダイ、或はジユマラタイの般に淸眞寺（リーバイス）を以て正名とし、その寺院の如きも從來禮拜寺を以て呼びしを耶蘇教會堂が禮拜堂と稱さるゝを忌みて、一如きを以て謂ふものが多い。因みに英語はイスラム寺院を Mosque と云ふは正音ではない。

イスラム教國の本地アラビヤは、一人の例外なしに全民族がムスリマアニ卽回教徒である。又支那の如き回教民族

が華人の中に混住してゐる地方にても、その一家族は例外なしに回教徒でなければならぬ。一家の主人が信徒ならばその妻子眷族は皆同教徒たることが原則である。回教徒は異教徒に對して「カアフィル」なるアラビーを以て呼ぶ、而して此語中に頗る排他的嫌惡的感情を含んでゐる、彼等の信仰は直ちに其宗教的戒律生活である、殊に飲食の上に於て頗る神經質である。「カアフィル」の手に由て作られたる飲食物は絶對に之を口にせぬ。かゝる集團的、持戒的宗教に所謂カアフィルたる吾等の入教するのはどんな風にすれば好いか。之はモハメッドの開教弟一歩が頗る簡單であり古の如く、凡そ回教徒たらんものは先づ第一に「イーマニ」乃ち誠信の發露を肝要とする、イーマニの發露は宇宙の眞宰たる「アルラーホ」を信ずるに至るべきである。故に此教の先達なる「イーマム」即ち教長が入教志願者の「誠信」の程度を判定し、入教の宣誓を爲さしむるのである。

耶蘇教徒が日曜日を以て安息日と爲すに反して、回教徒は金曜日を主馬聖日（アユマー）と爲し、入教式の如きも勿論此日を以て行ふので、清眞寺院内の聖座即ちミヘラアブの前に跪坐して燒香し、教長の天經讀誦（コラアニ）を聽き、徐ろに天を指し清眞言を唱へる、

「アシヘド　アンリヤイラヘ　ラインラ、ホ　ワホデホ　リヤセリカラホ、アシヘド　アンラモハメデノ　アブドフ　ワレスルホ」

このアラビーの意は「吾は證す、眞に萬物は主にあらず、唯「アルラホ」のみ獨一無二の眞主なり。吾は證すモハメッドは主の僕なり、主の使徒なることを」。而して此外儀律上に就いての受戒あるもそは別項に之を讓る。

茲に回教の神は唯一無二の眞宰なるアルラホを信じ之に絶對歸依する、一體イスラムなる語意は即ち絶對歸依てふアラビヤ語である。アルラホは在さゞなき普遍的の獨一神であつて其形はない、從つて回教の禮拜の對照として一切の偶像は存在せない。禮拜の殿堂内に聖座はある、支那では道、佛の形式化せられたミヘラアブあるも、之とて偶像は安置してはない。僅かに清眞言又は眞宰の神名等のアラビヤ字を、支那化して額や聯などにして掲げあるに過ぎぬ。支那以外の國の聖座は只アーチ型の白壁を存するのみである。

入教後は所謂經名を與へられる、夫は勿論アラビヤ名で本稿筆者の如きは「モハメッド　ヌール　ビーン　アダム」と與へられ即ち「アダムの裔なるモハメッドの光」と謂ふ義にて通稱には「モハメッド」だけを稱すれば好いのである。又入教と共に嚴行せらるゝ事は割禮（ナマーツ）の式である、割禮に附帶して一切の恥毛を削ることであるが割禮及恥毛除去の如きは必しもイスラム教義の主たる禮制とすべきか否、之は予に於て大に議論の餘地あるも、先づ入教の概略を記せばこんな事でよからう。

二　禮拜と方向、時、及沐浴

佛教に於て念佛三昧あり坐禪三昧ある如く、回教は之を稱して禮拜三昧（ナマーツ）の宗教と謂ふことが其本質をよく表示し得ると思ふ。既に偶像が無いから、禮拜は寺院内でも自家の室内でも又戸外原野でも何處でも、坐正しく、方向正しく、形正しく、衣正しく、心正しくんば差支ない筈である。が普通は寺院内で聖座に對して行はれる、聖座は只禮拜の方向（キブラ）を示すもので之が偶像的對照物ではない。回教に於ては禮拜とその方向、禮拜と共時、禮拜と沐浴、此の三點は最も重要なることである。先づ禮拜の方向即ちアラビヤ語のキブラから略說する。

キブラは世界中何れの地にある回教徒も、アラビヤのメッカなるカルバ神殿の方向に頭を向けねばならぬ。此事は回教に於て最も重要なる儀律で、マホメッドの宗教的威令が、世界を風靡するに至れるポイントであると云つてもよい。一體アラビヤの古教に於ては「東西は神の面なり」とし、禮拜の方向は東西何れにてもよかつたやうだが、後にメッカにカルバ殿堂の營まれ、又ベテルモカンデス即ち俗稱エルサレムに清淨宮の建てられてより、此二聖堂に直接參詣禮拜せざるものは、遙かに此聖堂所在地の方向に向して禮拜することゝ定められてゐた。マホメッドのヘヂラ以前メッカにありてはカルバに直接禮拜し、又其方向に間接禮拜したるもヘヂラ以後は、ベテルモカンデスの清淨室に對して禮拜した。之は概ね北面したことゝなるが、ヘヂラ二年二月に、斷然として彼に從へる信徒に嚴かなる命を下し、一切の禮拜はそのキブラをメッカに致すべきことを宣告した。彼は之を以て御神勅（アアリヅ）なりとしてゐる、此一事は自後の宣教戰爭に非常なる一致團結心と、又メッカの聖地恢復熱とをその信徒に與へしもので、將來の布教上多大の力を得た事であらう。

次に禮拜（ナマーヅ）の時である、普通之を五時のナマーヅと稱し一日に五回の修禮がある、五回の定時は時計の示す時ではない、太陽の出沒を標準とする、即ち日出前に一回、正午過に一回、正午と日沒の眞中にて一回、日沒前一回、夜間一回とかく五度であるがその禮拜の數は一々差がある。左にナマーヅ表を記す。

晨禮　バムターデ（又はゾボー）　四拜　アダムの制
晌禮　ビエシニ（又はゾホール）　十拜　イブラヒムの制
晡禮　デケレ（又はアツサル）　八拜　ユナスの制
昏禮　シヤーム（又はマンガリツブ）　五拜　アルサの制
宵禮　ホーフタン（又はイシヤー）　九拜　ムサの制

註、假字は支那回教徒の呼ぶ原名なるも之はペルシヤ系の訛音にて、アラビヤ原名は括弧内の名なり。

右の如く時を定め、又禮拜の數も各先聖の古制に準じ之を折衷して行はるゝ所に、回教の妙諦がある。モハメッド自身は特に何等自家の制を主張せずに、アルサ即ち耶蘇、又はムサ即ちモーゼ等の行ひし所を採用してゐる。禮拜の樣式の如きは實際を示すにあらずんば、記しても到底理解せしむる譯には行かぬから之を省略するが、日本人の如く端坐して叩頭し、後に立ちて鞠躬し、一禮終る毎に默禱し、最後に久しく端坐讃念す。一禮の內神、佛、耶、儒、道各教に俱通すべき一切の樣式の備はれる點に於て、予輩は回教のナマーヅを以て最も優秀なる典禮と頌贊するものである。

モハメッドは樂器を嫌惡した。故に回教の禮拜には一切の樂器を用ゐられぬ、只或る一派にては呼報にだけ太鼓を用ふる者もあるが之は小部分である。其代りに寺院附屬の高尖塔（ミナレ）の上にて呼僧の吟誦讃念するバンカナマーヅの聲の如きは、所詮その實際を聽いたものでなくては解らぬが、古人の謂へるが如く「糸は竹に如かず、竹は聲に如かず」で糸竹金石以上、清き人間の肉聲程美妙なるはない。新月の靜かに輝く夕、白衣の呼僧が尖塔の上に立ちて呼ぶを聽け、正に天籟の妙樂である。

アラーホエクベル、アラーホエクベル、アラーホエクベル、アラーホエクベル。アシヘドアリヤイラヘ　インラ、ホ〳〵、アシユヘドアンナモハメドラソラ、シ〳〵、ハンヤアランソリヤーテ〳〵、ハイヤアレルソリヤホ〳〵、アラーホエクベル〳〵、リヤインラヘインラ、ホ。

の如きリズムに富める音を、唄ふが如く、訴ふるが如く、鳴くが如く幾度か誦吟するのである。此聲を聽く時は、一切の信徒は直ちに起立してキブラを正し誦し了るまで動かない、吾等が「君が代」の聲に形を正す以上である。彼等は一日五回の禮拜を力める、工場に働く者は庭に出でゝキブラを正し、波止場に働く者は等しく業を中止して廣場に集禮する。旅の途上にても、船の上にても又汽車の中でも。若し病其他にて毎日のナマーズが出來ぬ者は、必ず金曜日の特別集禮には寺院に至り教長指揮の下に嚴肅なる禮拜を行ふ此日は十六拜で、教長の說教などもある。

次に禮拜と沐浴である。之は我が古神道がみそぎを本とするが如く、禮拜せんとする者は先づみそぎをせねばならぬ、みそぎは勿論身體の清淨の爲めであるが、其由る所は心の淸淨にあるは此教にても同樣である、但だみそぎ方法を分ちて小淨（アブデス）、大淨（ウースリー）、土淨（タヤムン）の三法とす。小穢は小淨法を執り、大穢は大淨法を執り、沙漠其他路上にて水を得られぬ時には土沙を以て淨めることが許されてある。沐浴法は色々細かな規定があつて、之を詳記するは教外者には徒らにくど〳〵しい事であるから此小稿中には書かぬ。但だ北支那の如き寒き地方にては何れも寺院に立派な浴室が備はりて溫浴法を執り、南支より南洋印度の如き地方にては寺院の入口に淨水池ありて冷水浴をする。前年ペルシヤの主都で米國總領事が此淨水池に土足を踏みかけて撲殺された珍事がある、回教民の淸淨觀は絶對的の者であるから教外者は注意せねばならぬ。

三　儀律と宗派

回教々義を大略にても叙することは、紙數の許さゞる所であるが、要はマホメッドが一生を通じて受けたる天啓を綴りしコロアニ三十篇である。信徒は此天經を絶對に信じてゐる、而して其政治も齊家も修身も悉く之に據つてゐる。從つて其日常生活、衣食住の上までも天經の權威が及ぶのは當然であるが、詮じつむれば天道五功、人倫五典の八字にても盡きる。少しく之を釋すれば、天道五功とは一、眞宰を念ずること。二、眞宰を禮拜すること。三、齊戒。四、布施。五、メッカ巡禮、是れである。人倫五典とは君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の道である。此の二道を完全に修するのは本より容易の事でないが、何れの國の教法とても畢竟此處に歸着する、一知半解の日本人又は耶蘇教徒などには、回教と云へば直ちに左手に可蘭右手に劍、只殺伐なる宗教、一夫多妻の淫卑なる宗教、耶蘇教と全然相容れざる野蠻教と云ふ位の概念に支配されてゐる。マホメッドの天啓はチョベレイルなる天使に由つて傳へられてゐる。天神アルラホと只の人たるマホメッドの間には此天使の存在を肯定されてゐる、此外多くの惡魔や天使も存在してゐる。天の御中主神の外に、八百萬神があるのを徒らに多神教と見る耶蘇神學の愚見は回教の一神教を何と論ずべきか。五時禮拜中にアブラハム、モーゼ、イエス等の禮制を採れるモハメッドを何と觀るべきか、加之その天經コロアニの全篇到る處に豫言者イエスの言を引用せるを何と觀るべきか。從來回教民族に對して耶蘇教宣教師が、其改宗を勸請せるも未だ多くの改宗者を出せることを聽かぬ、之は改宗者なきが當然にて、回教も耶蘇教も西方亞細亞民族の古道であつて、其の淵源は同一である。モハメッド自らも明かに吾は耶蘇の教を紹述せる者だと云ふてゐる。然れどもモハメッドの出でたる當時のアラビヤは、其古道全く廢頽して耶蘇の爲したる救世運動と其遺教も、僧尼の墮落に由り、或は小乘佛教の流入に由り、或は拜火教の染傳に由り、實にメッカの神聖なるカルバ神殿さへも、その中に鬼神の像を安置する樣になつた。

モハメツドの生涯は開教前の四十年間にあらゆる人生の苦を嘗めた事を推知する外、大した記錄は傳へられてゐないが、彼と天と祖國の道とを一貫して、此の聖人此の英雄を思ふ時、かゝる沙漠の賤丈夫が開教より百年を出でずして世界を震駭し、殊に白色人文明を壓倒したる蹟は、之を單に「劍と可蘭」位の概念にて片附くべき者ではない。

コロアニ天經は信仰の中心であると共に法典であり、修身齊家の書である。よく人は回教徒の男女觀に就いて徒らに非難するものがあるが此に一言卑見を挿む。抑ゝ一夫多妻制度は各民族の古代に於て共通の習性であり、又必然の社會狀態であつたらう、之を支那の禮記に鑑みても同樣である、マホメツドは地上天國の創立者で、理想天國の夢想者ではなかつた。彼は夫婦の道を說きて「夫は婦の衣なり、而し婦は又夫の衣なり」と訓ふ。男女同尊の原理を明示してゐる。而して「男は若し等しく之を愛すを得ば、四人迄の妻を有つことを得」と諭してゐる。或は女の犯罪と月經につき、或は姦淫と四人の證人につき、吾等はモハメツドのかゝる人情の自然と仔細とに對する用意を、あの沙漠の中なる生活と、當時の國情とに鑑みて、實に人間らしき眞教を宣示した者として推稱せざるを得ぬ。

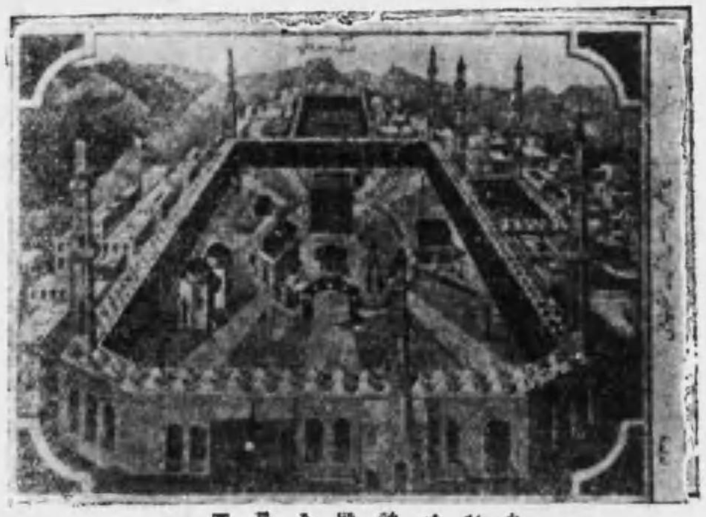
回教儀律を學ぶには、一冊の天經あれば足る故に和譯書なり英譯書なりを通讀すれば自ら發明しやうから、一々之に論及せぬ、只以上の如き見解を參考とせられたい。

天道五功と云ふ如き宗教的內修外行の事は、其仕方に各宗教多少の異同あるも、之れとても詮ずれば一である。但禮拜三昧教たる回教にては自然持戒が嚴重である、經典を讀むにしても沐浴せぬ時は經を開かぬ、又之を持つに右手を以てし腰より下さぬ。齋戒にしても回教曆九月レメゾアネに於ける滿一ケ月の、日出より日沒迄白晝絕對の斷食絕飲の如き、全教徒が擧家一同に嚴修することの如き、恐らく既成宗教の何れも此の嚴肅さに比すべきものはなからう。予輩の如きも此斷食行を修めながら、支那を旅行しアラビヤに向つて出發したが、一通の苦しさではなかつた。布施の効果の如きも佛教にても六波羅密の一たり、その主旨に於て變りもないが、共產主義の原理も社會主義の要諦も、畢竟此に存しはしまいか。予は此の短かき記述に於て、回教徒の五功中最も重きを置くメツカ巡禮を特に誌して、此項の總括をしておきたいと思ふ。儀律上の天經中に窺ひ難き樣な點は、此の中に挿入しておくから次項に就いて承知せられたい。

茲には回教の宗派に就いて概要を記しておく、之れは回教國の現勢や回教發達史を考ふる上に必要な事であると思ふ。一體回教々史から觀て其宗派を論ずれば、スキンニツト、及シヤーの二大派に區別し更に七十二派を小別するも、アリーを宗として分派せしシヤー派は極めて小數で、回教國の大多數はスキンニツト卽ち正統派に屬し、支那全土に於ける大約四千萬の回教徒の如きも一人の例外なしに此派に屬してゐる。然れどもスキンニツトを大別すれば四教派と爲り、ハナフイー、ソフイヤー、ハンベリー、マーリケーと稱するのが夫である。是はモハメツド昇天以後此等の四賢が天經の解釋を異にし、又は聖師の行則を取捨したことから大同小異の分派を生じた者で、各派間の差異は佛教や基督教の如く著しき部門を形成してゐるものではない。元來が回教にては經典が唯一のコロアニにして之を絕對に信じ之に服することが、その教徒たる第一要件なれば、かくあるのが當然である。併し此に前記四賢に由る四宗別を略敍すれば、(一)ハナフキーは前賢「ハニハ」の創始する所、彼はヘヂラ紀元八十年(西紀七六七年)クハに生れオムミヤ朝の教皇(カリフ)の下に、其高弟アブユソフ及びアブモハメツド等と與に、編纂したるイスレアム儀律ハナフキー法典は此派の權威にして、之が普及はユソフの努力に由る所多し。ハニハは晩年教義の解釋を異にするアツバス朝カリフの

下に判士たることを拒み、回曆一五〇年バグダッドの獄裡に死んだが、彼の在獄中實に七千回以上天經を念誦せりと傳へられ、其學問德行は亞聖の域に達したるものであらう。支那全土及印度の大部分、緬甸の一部、阿富汗斯坦の大部分、亞剌比亞全土、土耳古等の主要なる回教國は此ハナフヰー派に屬するものである。然るに暹羅、交趾支那、馬來、ジヤワ、スマトラ、ボルネヲ、フヰリツピン諸島と埃及とは(二)ソフイヤー派に屬してゐる、此派の始祖「ソンアイ」はハニハのバグダッド獄裡に逝きし日(即回曆一五〇年)パレスチナのアスカロンに生れ二歳より五十歳迄メッカに移住し、後にミソレ(埃及)に入り、回曆二〇四年カイローに死したる者、彼はギリシヤ、ルミー(羅馬)の哲學法理を研めて、イスレアムに會通したる所多きが如く、後年カイロー大學が該教の最高最大の學府として現存せるは、其據る所此に負ふものなりと考へらる。(三)ハンベリー派は「ハンベル」の始むる所(回曆一六四——二四一)、ソフアイと時を同ふし、寧ろ教を彼に受けたるも、大に方便門を開き異教徒の改宗運動などに成功したが、今は全く振はず教勢謂ふべき者はない。(四)マーリケー派は、マーリを始祖とし(回曆九十五——一七九)彼はマホメッドのスキインナタ即ち其言行を寧ろ天經以上に尊重し、之に違はざらんことを力むるもの。モロッコ及びバーバー族間の小部分に行はれてゐる。メッカのカルバ神殿に巡禮の大集が參詣する時には、此四派の位置は、東面はソフイヤー、西面はマーリケ、南面はハンベリー、而して北面はハナフイーと定められ、各〻其派のイーマム(教長)の指揮の下に禮拜を嚴修することゝなつてゐる。

四　メッカハンヂ



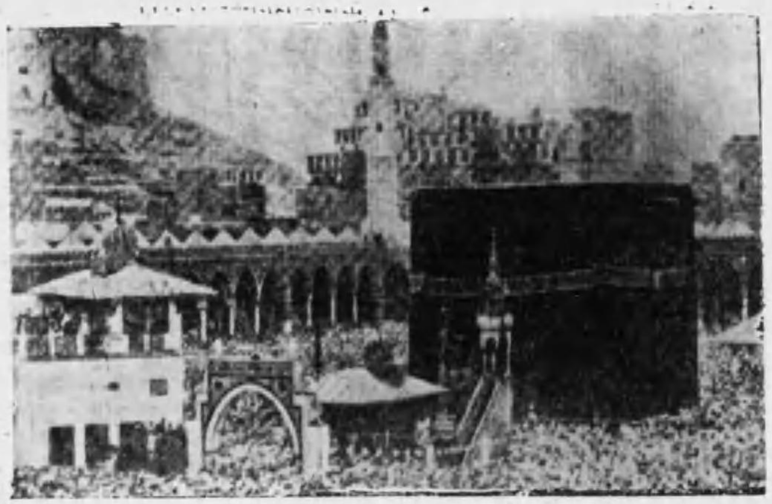
カルバ神殿全景圖

回教徒の五功の内、其修道の完成を告ぐるのは聖地メッカに朝するにある。即ちメッカ巡禮が如何に回教徒に取りて重要にして、又此の重要なる巡禮を無事爲し了りしことが、彼等の喜悅であり又名譽であるかは、教外者の推測することも出來ぬ程である。日本では西國を巡禮と謂ひ、四國を遍路と爲す。支那回教徒はメッカに赴くことを朝ハンヂと漢阿重複語を用ゐてゐる。「朝とは命に復して眞に歸する也」と、メッカのカルバ神殿に參詣することを、支那回教學者として有名なる劉介廉はその遺著天方典禮に釋してゐる、且つ曰ク「人は惟だ懷土の念深く契道の念淺し。朝覲を命ずるは絶域登途其貪戀を去り以て本原に近づかしむる也。夫れ朝覲の人、割愛離家、崎嶇跋涉、而る後其境に詣るを得。則ち凡そ修道の人も亦必ず克く己私を去り、勤修苦行して後其眞に還るを得。此れ又有形の朝覲を借りて無形の朝覲を啓くの義也、此を修して而る後天道盡く」云々と謂ふてゐる。世界各國三億の回教民中より年〻回曆十二月初めを期してメッカに相會朝するもの六十萬より百萬の數に達する。メッカハンヂの業はモハメッドの創始ではない、アラブ族の傳說としては上古イブラヒム(即ち舊約のアブラハム(西紀前一九九六——一八

二一〇)の妻ハヂール、その子イズマエルを携へて漠中を彷徨ひメッカの谿谷に來て、切りに渴を覺えソファとメルワ二峯の間を馳せめぐりて泉を求めた所、幼兒イズマエルは泣き喚び乍ら一地を蹴立てたるに、不思議にもそこから甜泉が迸出した、之が今日カルバ神殿の傍に現存してゐるザム〳〵泉である。此泉はメッカの全市民が用ゐても盡きず、年々來朝する幾十萬の信徒も此神泉を掬してゐる。かゝる井泉あれは自然此處を中心として市を爲すべく、而してイブラヒム父子の如き聖人が神德を頌へて宮殿を創始したから、玆にアブラ族のメッカ巡禮の事が行はれ出したのだと謂はれてゐるが、西洋史家の說は之を一個の傳說とし遙かに後世なる西紀五世紀頃コッサイ時代以後を以て史的事實と見做してゐる。併かし予輩はアラブ傳說を其まゝ立派な歷史的存在と信じてゐる、そは身親しく彼地に參詣し此盛大なるハンヂの勤行に臨みて、イブラヒムよりの連續せる此の民族の古道の跡を明白に認め得るからである。

メヂーナはモハメッドの墳塚の所在地なるも、ハンヂの行は之に詣るを要せぬのは、彼以前の古道に準じたるもので、一體回教徒はモハメッドを眞宰たるアルラホ神のパンタイ(僕)と信じ、之を以て禮拜の對照とはせぬ。アルラホ以外に絕對に回教儀律に據る禮拜は致さない。卽ちメヂーナ聖陵に詣るも只之を敬するのみにて拜せぬ。モハメッド教へて曰く、「人は人を拜せず」と、此に拜とは端座叩頭の意で、叩頭卽ち頭額を地につけて禮拜することは、之を只獨一の眞神にのみさゝぐべき事と戒められてある。從つて人對人の間には握手、右手には自己の額を撫で上げ、更に之を胸に附する、或は抱擁接吻(男同士にても)或は單に「ソレアム、アレクム」と一拶する、又合掌等の禮法を用ふる。

メッカは回教國の宗主なれば、カフイル卽異教徒は絕對に入ることは禁じられてある。故に現今のエルサレムの如く單なる見物旅行者は立入ることは出來ない。世間普通の地圖にはエルサレムからメヂーナを經てメッカ迄既に鐵路が通じてある如く記されてあるがメヂーナ以南には未だ通じてはおらぬ。何れからしても沙漠地帶をキャメルに乘つてメッカには行かねばならぬ。



カルバ神殿の本殿圖

アラビヤの西部、紅海に沿ふ南北に延びた凡そ十七萬方哩の細長い地方をヒヂアツズ王國と云ふ。メッカは其中央に位する、而して回教信徒は此聖都を以て實に地球上の最中位と信じてゐるが、之は事實さうも考へられる。此王國は大正五年六月、英國の援助で土耳古の配下から脫して新たに出來た小獨立國である、メッカのシエリフたりしフウセインは多年自ら回教の最高位たる教皇の位をトルコより奪はんことを企圖してゐた。彼はコッサンの後マホメッドの裔だと信じてゐるから、當然カリフたるべきものと自認するのも無理ではない。歐洲戰は獨逸に味方したる土耳古の困厄、是を利用した英國とその又藥籠中に入つたヒヂアツズ王國とは、遂に各〻豫定の政策を施した。予のメッカ參詣に行きし

時は實に此の願望の完全に實行された第一年であつた。メッカに行くには北西部の亞細亞から來る者は汽車を利用するもの、キヤメルに騎乘するもの、甚しきは全く徒歩の者等あるも、支那南洋印度等より行くものはアラビヤの「ヂュッダア」港迄船で行く。行くには一定の期節がある、此期間は英國の汽船會社などが主として巡禮船を仕立てる。其基點はシンガポール、ボンベイ等で亞細亞諸國の巡禮者は是等の地點に集合して出發する。支那の巡禮團は上海に集合してから便宜新架坡に行くものと、雲南貴州福建廣東等の者は海南島に集りて後新架坡に行き、巡禮船を此に待つのである。再び斷ておく、彼等は異教徒の手に由る飲食を絶對にせぬのであるから、殊に嚴肅神聖なるべきメッカ詣でには一層此戒を謹しむ。玆に巡禮船旅行の必要と妙趣とが存在する。

何と謂ふても英國は依然として大亞細亞の覇王だ。現在大部分のイスラム國は概ね其配下にある、白人から觀て野蠻の宗教を固守してゐる劣等な有色人、併かしその固陋なる信仰が、命を捨てることを平氣で、イザと云へば一致團結するので、之を表裡から巧に操縦して行く英國の政策は實に癪には觸るが、日本などはまだ〳〵大英國の前には小兒の狀態である。名を檢疫に借り、新架坡にしても孟買にしても、又特に紅海中の一沙洲カムラーニ、或はアラビヤ沿海のゼヂラ孤島にしても、かゝる嚴重なる關所改めを受けては、亞細亞人たるもの到底手も足も出でぬ。予は新架坡を出發してから、船上に自炊し乍ら、ムンスーンの吹き荒む最中三十餘日を費して、英國汽船の上にデッキバッセンヂヤーとなりつゝヂュッダアの港に着いた。ヂュッダアは此國唯一の港と雖も、粗板さへも滿潮時ならでは岸につかぬ。

神の前に出る者は總て一律一體に唯一の人である、其服裝の如きはイヘラームと稱し白布の大巾なるを二條、一を上

衣とし一を下衣として腰に卷く。帽子もいらぬ靴もいらぬ。メッカの神殿に行ても一切平等である。ヂュッダア海關で信徒たるや否の身分改めがある、此地の宿屋に滯在してショクドの用意を待つ、ショクドとは駱駝の背に左鞍と右鞍とに臥られる程の轎を附したもので、支那で云ふ駝轎とは異るものだ。或はヤリカブと稱する木鞍に二人乘る仕組の駱駝もあるが、之は夜行睡魔に襲れたら不安だ、キヤラバンは普通晝泊夜行である。ヂュッダアよりメッカ迄二夜行程、途中にボハラと云ふオーシスがあつて井戸と休息所がある。毎日何千人と線込む此道中は人の乘た駱駝隊と、荷を積んだ駱駝隊との大縱列で、而かも人間は全部白衣を纏ふて、其上に武裝したる嚴しき者もあり、實に一大偉觀である。殊に夫が毎日一點の雲影もなき夜の世界であるに於て、何者も此神秘的壯美の光景に比すべきはあるまい。

晝泊夜行せねばならぬ程の熱いメッカに、長の難航海から辛うじて入都するや否や直ちにカルバ神殿に參朝せねばならぬ。極めて尊き水を得て沐浴を了するや、足の焦るやうな大理石の庭を踏んでカルバの周圍を七匝する。或は漫歩し或は疾走し、常に朝覲の經文を高聲に念じつゝ。世界中から來た群集はドヨメキヘシメキ乍らも一心不亂に勤行する、終りてイブラヒムがカルバを修せし時に立ちしと云ふ石の附近に坐してハデフアーと云ふ經文を念ずる。此經は毎時禮拜の時にもよく讀まるゝ者である。然る後ザム〳〵井泉を飲む、數杯の清水の、如何に貴く難有感ずるか。此參詣の出來ぬ疲勞者、病人が無數にある、彼等は或は人の肩に靠り或は蓮臺の如き者の上に横はり乍ら、遙ゝ來た以上せめての義務を果たす。此カルバ七匝を了りてから禁庭を出で、更にソフアーとメルエー山下の谿谷を念經しつゝ七度疾走する。是れ前記の如くイブラヒムの妻ハヂールと其幼兒イズマエルとの苦辛を念ふての道行と爲されてゐる。歩行に堪へぬ行者は驢や蓮臺を用ふる。之を了して剃髪し、始めて自由の身と爲る。或は此行だけで倒れてその

まゝ天堂に逝くものも日々幾許もある。疲勞と暴熱と飢渇との貴き體驗、何十萬人の信徒は貴とゝなく賤とゝなく同樣である。

宿に居たとても皆な自炊である、薪と水とは非常の貴き者である、日々極めて少量の水を得、型の如き沐浴を修めて、毎日五回カルバに禮拜に行く。而して回曆十二月八日からは一週間、メッカの東方十二哩にあるアルファット山谷に出征する。此谷は實にアダムイーブの發祥の地と傳へられ、此に打くことがメッカ巡禮の主要行とされてゐる、若し病に托して行かぬ者があらば嚴刑に課せられる、ハンヂの行は當初より捨身の業である、たとへ死すともメッカにて死せは人生の本懷と信じ、更にアルファット山谷にて死なば全く人間の源に歸すると信じてゐるから、萬難を忍んで出征する。

教皇を先頭に壯嚴なる武裝隊を從へ、山砲中隊、軍樂隊、ラクダ隊、騎馬隊、歩隊が進むと例のショクドやヤリカブのハンヂ隊がメッカを黄昏に出發して、途上のミナ山谷に泊し翌日の夕アルファテに進軍する。禮拜の時刻は一々山砲數門の一整の轟音にて、白衣の道者はメッカの方向に對して禮拜の式を行ふ。予の行ける年は大約百萬人と注されてゐたから、此野外禮拜の光景は何とも云へぬ大觀であつた。アルファテ山谷は茫々たる沙場、王も民も用意の天幕を張りて二日間、熱いことも此二日間を以て最上とする。死者は續出し到る處にて沙を掘り白衣の死屍を埋めてゐる。是れ一大聖戰である、予は之に對して何等の批判を事後より加へたくない。予輩とてもメッカ入都より幾回か死に臨んだ、支那より同行した八十九名の同行は無事に歸つた者は半數に滿たなかつた。

白隱禪師の墓の周圍に幾多の殉道者の小さな墓がある、皆老漢會下の雲水にて其の嚴格なる鉗鎚に倒れた者ぞさうだ。泉岳寺に四十七士の墓を、其舊主の畔に觀ると同樣の感あらしめる。一は佛道の爲に一は武士道の爲に死を求めて死を得た者だ。予輩日露の役に從ひ一朝にして戰友の死屍累々として左右に横はるを暗るもの幾度かであつた。是亦君臣の義を踏む大日本道に殉した者だ。メッカ巡禮の悲壯なる光景は、その道を信じ此行を修むる者以外に彼此謂ふべきでもなく、又其眞髓を不信者に語るべきではあるまい。萬世一系の天皇の御名の下に敢然と死する日本は亞細亞極東の奇蹟(ミラクル)である、喜んで死に赴くメッカ巡禮が有史以前より今日迄益々榮え行くは亞細亞極西の奇蹟(ミラクル)である。吾等は此地球上の二大奇蹟を貫通して一個の眞理を發見する。人の予輩を以て大亞細亞主義を提唱すと爲すも、是れ世の所謂大亞主義なるべきか否、予はメッカに參詣し、敢死の勤行を修めて一大悟道を得た。

アルファテからムズダリファエを過ぎて再びミナ山谷に來る。ムズダリファエの一夜は世界の汎回教運動に密接の關係がある。英國の杞憂は實に此一夜に在る、今は詳しく之を語るまい。此處から一度メッカに歸りて一週間勤行の無事に濟めることを神殿に詣してアルラホに言上する。此御禮參りは此年殊に熱きを以て教皇だけが代表して修めた。ミナ山谷に歸りて白衣を改め常服と爲し、手ら家畜を宰し、貧者に惠み各々又之を喫し幕營の下に打集ひて祝賀の宴を張る。天道五功は完成された喜びは歸鄕の後、敬稱を加へられてハッヂ何某と呼ぶ、頭には白き無鍔の帽を頂き鄕黨の長老と爲る、どこからも印可も修行證書があるではない、只天命を信じ、人も之を敬し自らも其位に居る譯だ。

五回教問題

以上の極めて簡單なる回教に關する記述を以て、教外者には多少の感を與へ得たと信ずる。今本稿の結論として回教問題の項を設けて見たが、前項中には既に幾多の回教問題を提示しつゝ、宗教としての回教を概說したから、餘白の乏しきに臨み條理を立てゝ此大問題を論ずるのは、聊か困難であり又本講座の如き趣旨の下には、少しく不穩當にも考へらる。

The New word of islam(1922)の著者 Lothrop-Stoddard 氏は將來の世界の問題は明かに有色人對白色人の戰爭を豫定し、更に其具體的事實として回教徒の覺醒的近來の諸傾向を擧げて白人を警告してゐる。無力なる予輩が曩に回教徒として亞細亞諸國を訪問し、時々卑見を公表するや、英米の亞細亞問題を研究する識者と官憲當局とに甚しき注意と刺戟とを與へてゐる。予輩は今多年の海外放浪の旅より東都に閑居して、回教問題を考察しつゝある。而して日本人たる予は吾人の第一原理を「大日本帝國」と信じてゐる。長き旅行より歸るや「大亞細亞主義卽日本主義卽惟神道」と歸納して、有色人種の先頭に立ちて世界的水平運動を爲すべきを日本及日本人の使命なりと主張してゐる。德富蘇峯氏は予の紀行に序して「兎に角有色人對白色人の勢力が現在の如く隔絕してゐては、世界の平和とか全人類の幸福などは、所詮之を求めて獲べからざるのことだ。有色人の代表的地位に在る日本が全球に對しての水平運動を敢行することこそ眞に天命に應じたる人類正義の行動である、然れども之が實際問題としては、有色人の大多數は實にイスラム教徒に對する諒解と同情とが普遍的に大和民族中にも存在するに非んば徒に有色人同盟の、亞細亞聯盟のとカラ威張をした所が畢竟一個の空念佛に過ぎない云々」と謂ふてある。

ケマルパシヤの蹶起は從來の汎回教運動を失望に了らしめた者である、何者回教は帝王國家を本體とする、佛米の援助を受けて成功したる新土耳古は一朝にして教皇を追放し舊來の回教儀律を粉碎した。多年土耳古を宗主國とした回教民族のパンイスミズムは其根柢に於て大なるヒビが入つた。歐米の回教研究家が謂ふ如く回教は宗教として今正に岐路に立つてゐる、宗教的解體か或は且てルーテルの爲したる如く回教の改革か其一を撰ぶべきであると考へられるが、日本の勃興と回教民族との連合とは、白人存亡の分岐であることの國際勢力の將來は、單に宗教的見地からのみ回教を考へてはならぬ。今や獨逸も佛國も米國も、其の首府に回教寺院を建設し、英國のロンドンモスクの如きは英國貴族の信徒すら少くないやうな現勢、歐米列强が回教民族を懷柔するに苦心しつゝある現狀に對して、帝國は支那に信を失し更に有色人全體よりも賴むに足らぬと觀られてはおらぬか、日露戰爭に依りて得たる帝國の名譽は歐洲戰後投じた火藥なしの「人種差別撤廢案」と云ふ巨彈に全く行詰の爲體である。回教問題の眞義は實に此處に存する、世の識者は深く思を致すべきである。

昭和四十年六月十三日印刷
昭和四十年六月十五日發行

日本宗教書籍
第十七回配本

發行所　東京都神田區一ツ橋二ノ三
株式會社東方書院
振替東京六三八四二二

印刷人　東京都小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社
代表者　青木善藏

製本　東京都神田區司町二ノ一七
遠藤直穩
製本者　三井嘉史

印刷所　東京都神田區一ツ橋二ノ三
株式會社東方書院
代表者　三井嘉史

製複許不

終